

言葉と人間の関わりを理解させる「国語」の授業

——体育専門学群生を対象として——

石 塚 修

I はじめに

人間が言葉を「理解」するうえで「経験」との関わりが大きいことは、サピア・ウォーフの仮説によって知られる^①。そして、その主張は「言語的相対性」・「言語的決定論」とも呼ばれている。ただし、この説については現在までのところ、支持・批判の双方の見解があり、それについては、池上嘉彦が、

現在までのところ、「サピア・ウォーフの仮説」を全面的に肯定するか、または、全面的に否定するか、そのいずれもできないというのが結論のようである。これはこの仮説がサピアにせよ、ウォーフにせよ、十分厳密な批判が可能な程明確な形で規定していないことが決定的な原因であろう。しかし、一方、われわれが当然のものと考えがちな言語というものの本質を鋭く指摘してみせた洞察には、直接関係ある哲学者、心理学者、人類学者、言語学者ならずとも、深い興味をそそられずにはいられない。哲学者ブラックが「このようにして広い関心と呼んでいる問題であるのに、かくもつかみどころのない形のままで置かれているのはふしぎなことである。」(Black 1969)と結んでいるのは、この間の事情をよく表わしている^②。

とまとめている。こうしたなかで、安易にこの理論に依って「人間」と「言葉」の問題について論ずることは、言語学的には大いに危険性があるといえよう。ただし、国語教育のうえからはこの理論はあながち否定的に見るべきではないように思われる^③。たとえば、平成8年7月に出された第15期中央教育審議会第1次答申に盛り込まれている「生きる力」の一つとして挙げられている。

いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力^④。

を「国語教育」の上からどのように育てていくかを考えた場合、先のサピア・ウォーフの仮説の応用は有効であるといえよう。このように国語教育の今日的課題を考えたとき、経験による言語世界を重視するサピア・ウォーフの仮説がすくなく解決の糸口をもたらしてくれることへの期待は大きい。また、このサピア・ウォーフの仮説を継承し、個人の「経験」と「言語」の関連づけを「言語的中间世界」の存在を提示しておこなったレオ・バイスゲルバーの見解も注目に値するのではなからうか^⑤。

私たちが、人生のさまざまな局面でさまざまな言葉と出会い、それらが精神世界に取りこまれ、何か機会あるごとに記憶から呼び出され、私たちに励まして「生きる力」と結びつくことは、け

って珍しいことではない。たとえば、志賀直哉の『城の崎にて』のなかに主人公が次のように述べる部分がある。

自分は死ぬ筈だったのを助かった。何かが自分を殺さなかった。自分にはしなければならぬ仕事があるのだ。—中學で習ったロード・クライヴといふ本に、クライヴがさう思ふ事によって激勵される事が書いてあった。實は自分もさういう風に危うかった出来事を感じたかった。そんな気もした⁶⁾。

これは、小説の例ではあるが、一人の「人間」が「言葉」を自己の中に取りこみ「生きる力」とした例といえると思う。こうした例は、他にも国木田独歩「日の出」の『『日の出を見よ』』といふ警語は今も昔に變りなく、恰も日の出の力と美とが今も昔も變りないやうに全校の題目となり、目標となり、唱歌となり居るのを御覧になりましょう。』⁷⁾といった部分やS・スマイルズ著中村正直訳『西国立志編』(明治4年)⁸⁾などにもみられる。また、身近な例としては、「読売新聞」平成9年1月12日付朝刊投書欄の横浜市の主婦の「“貯言”の楽しみ」という投書などが挙げられよう。その一部を引用すると、

「女あり 二人行く 若きはうるはし 老いたるはなおうるはし」「訪れる人にはほほ笑みを去り行く人には幸せを」

私のノートにはたくさんのすてきな言葉が書いてある。貯金通帳ならぬ「貯言通帳」だ。(中略)

ささやかなシルバーの文通の会を主宰している。月初めに発行する会報に、すてきな言葉の一つ書き添えたくて、通帳からおろしている。蓄えるだけでなく、使い道があることにも感謝している。

とある。この主婦の例と『城の崎にて』などとでは言葉の取りこみ方の次元はやや異なるかもしれないが、自己の内面にある言葉を取りこんで「生きる力」として何らかの形で活用させている点では共通しているといえよう。このような例を個人という次元で求めていけば枚挙にいとまがない。こうしたことが、もし、極めてあたりまえに無意識のうちに人間の内面でなされている営みであるなら、何もいまさら新しい問題として取りあげる必要性があるのかという反論も当然あるだろう。しかし、いまここであえて新しい問題として取りあげようとしたのは、教育的立場から、そのあたりまえのようになされている内面の営みを、学習者個々人に「言葉」の持つはたらきとしてはっきりと意識させていくべきだと考えたからである。人間が一人ひとり「言葉」を用いていくとき、その「言葉」に自己の「経験」を重ね、それによって「言葉」を「生きる力」へと変えている営みが多くあることを意識させることは、国語教育のうで言語感覚を養成するためにも大切なことといえよう。

さらに、こうした「言葉」と「経験」の関わりは、人間の「言葉」における「メタファー」の問題とも深く関わっている。それは、個人が特別に意識もせずに、ある言葉を「いい言葉だ」とか「心を打たれる言葉だ」というように自己の内面に取りこんでいくとき、実は、その言葉の多くが「メタファー」となって個人の中に取りこまれているともいえるからである。すなわち、「人

間の経験」と「言葉」の関わりを深く理解していくことは、「言葉」における「メタファー」の機能をも考えることにもつながっているといえる。

「人間の経験」と「メタファー」との関連については、先のレオ・バイスゲルバーの理論を引き継ぎ、「言語中間の世界」の中心に「隠喩」を捉えたG・レイコフ・M・ジョンソンによる研究に詳しい。その概要を渡部昇一は、

人間が生きて行く時、いかなる人も自分の人生観とか世界観というものをもっている。それは当人が意識しなくても“物の見方や考え方”というものが誰にもある意味である。人は意識しなくても、物の見方や考え方は、一種構造的なものであり、その構造はゲシュタルト的のものである。ゲシュタルトという言葉は、元来は経験心理学の用語であるが、ごく簡単に言えば、心理的に認識されることは、個々の知覚された個々の事項の単なる総計ではなく、部分の総合以上の何物かである全体構造を成す、というものである⁹⁾。

と述べている。

今回の試行的実践では、このG・レイコフ・M・ジョンソンの理論をも視野に入れつつ、「経験」と「言葉」の問題をどのように国語教育で扱えるのかを考えてみた。ただしその際、「ゲシュタルト的構造」は民族的次元から個人的次元にいたるまでさまざまな集団の次元で存在の可能性があるが、試行の「場」をどの次元に設定するかが問題であった。その選択が不適切だと、学習者にゲシュタルト的構造が理解できないままに終わってしまう試行にもなりかねないからである。

そこで、私が試みに取りあげた集団は、大学で体育を専門に学ぶ大学1年生の集団、筑波大学に共通・選択科目としておかれている「国語I」の講義を受講している学生たちである。いくつかの学生の集団のなかから、特にこの集団を取り上げたのは、彼らは一般の大学生よりも、特に「からだ」の「経験」をつうじて「言葉」の世界と向きあう機会が多いと考えたからである。実際、彼らの多くは、あるスポーツ種目を幼年期から続け、ある程度の成果を果たした「経験」のある学生である。そして、その競技経験の一部として実際に「言葉」と向き合い、自己を叱咤・激励した（された）「経験」も多いようである。

ところが、彼ら自身は、そうした「経験」と「言葉」との関わりについて「なんとなく良かった」とか「何となく励まされた」というように漫然と感じるのみで、その事実を相対化してとらえられてはいない。そこで、先のG・レイコフ・M・ジョンソンの主張にもある、

理解にはまた、経験上の根拠が必要である。経験主義者によれば、われわれの概念体系は物理的文化的環境の中におけるわれわれの普段の円滑な活動の中からあらわれ出てくるものだと言う。経験のカテゴリーと、そのカテゴリーが構成される基盤となっているさまざまな相は経験の中からあらわれ出てくるばかりではなく、円滑に行なわれている活動に照らして文化の全構成員によって絶えず検証されている¹⁰⁾。

という人間の言語理解の一つの過程を認識させ、さらに「言葉」と「人間」についての理解を深めさせていくために、今回のような実践が必要であると考えたのである。将来スポーツコーチをめざす学生に、個人的次元での「言葉」の「経験」が、実はただ雰囲気的に気分まかせになされ

ているのではなく、G・レイコフ・M・ジョンソンらが指摘する一定の構造をはらんでいることに気づかせることで、コーチングにおける「言葉」の重要性を理解させていくことにつなげていくとしたわけである。どの種目であるにせよ、スポーツ競技という人間の営みのなかで、ある「経験」を競技者が共有することはあるはずである。そのとき発した、または発せられた「言葉」が個人の内面に「メタファー」として取りこまれ、記憶のなかにとどまり、後日、同じ経験の場にある自分や他人にも敷衍して用いられる可能性を秘めていることに気付かせようというものである。そして、そのことを理解すれば、スポーツコーチとして自己の経験をなんらかの言葉に託して表現し、より効果的に選手に伝える能力が養成できるのではなかろうか。コーチは、たんに技術的な面の指導にとどまらず、時としては選手の精神面の根幹をなす部分をも支えなくてはならない。そのとき、適切な「メタファー」が効果的であることもコーチとしては知っておくべきであると考え。以下は、そうした専門話法（職業話法）の習得を目標とし、体育を専門とする大学生にたいして「国語」の講義を展開した実践の過程とその結果、および分析である。

II 実践過程と結果

対 象 筑波大学体育専門学群 1年次生 51名（男40名・女11名）

講義名 国語Ⅰ 第2学期 10時限

単元名 「コーチと言葉」 10時限中4時限

単元の目標

- 1 将来コーチとして活動していくうえで、どのようなときに、どのような言葉を競技者にかけていくべきなのかを考えさせ、コーチングにおける言葉の重要性を理解させる。
- 2 人間の経験と言葉の関連への理解を深めさせることで、どのような表現がより効果的に人間の内面に取り入れられていくのかを考えさせ、言語感覚を身に付けさせる。

構 成 1時限 コーチングと言葉の関わり

課題1 「言われて嫌だった言葉うれしかった言葉」（表1）について回答しながら、自分のこれまでの競技経験との関わりについて考察させた。

2時限 コーチングにおける言葉の実際①

（表1）結果の検討を行いながら、どのような言葉が人間にとって心に刻まれたり、心を傷つけたりするのかを考察させ、課題2「こんな時にどう言うか」（表2）を回答させた。

3時限 コーチングにおける言葉の実際②

（表2）結果の検討を行いながら、自分なりに他人の心に残したい言葉を考えさせ、課題3「この言葉をこの人に」（表3）の作文を課した。

4時限 課題3を清書させ、提出させた。

(表1)

次のような場面で、あなたなら相手にどんな言葉をかけてあげますか。

- 1 もうすこしで、逆上がりができそうなのに、泣きだしてしまい鉄棒をやめてしまおうとしている子供に対して

回 答 例	賛成	反対
A 鉄棒と友達になることからはじめよう。	0	3
B 何事も最後の一步が難しく進めないものだよ。	4	3
C あとほんともうすこしできそうだったよ。もう一回やってみようよ。	10	1
D どうせ泣くなうれし涙を流せ。	6	10
E あと2回だけやってみてくれ。	3	5
F ここでやめたら一生できなくなってしまうよ。それでもいいの。	1	11
G どうした!○○ちゃん。よーし、すこし休もうか。	5	1
H 少し休憩しよう。鉄棒は逃げていかないから。	6	1
I 君ならできる。	3	1
J 僕はもっともっと練習してできるようになったのだから、やめないでもう少しやっごらん。	3	4

- 2 せっかく練習してきたのに、試合直前のけがで、試合に出られなくなってしまった生徒に対して

回 答 例	賛成	反対
A 今無理をして試合に出て、けがが悪化させて、この後プレーできなくなるより、今は我慢して今回はみんな見て、学ぶのがいいよ。みんなをサポートするのも勉強だからね。	10	1
B けがをしたのは体を休ませなさいという暗示だよ。仕方がないと思って、次をめざそうね。	2	3
C 自分がなぜ怪我をしたのかも一度考えてみる。気持ちのうえで何か問題はなかったのか。体の調子はどうだったのかをふりかえり、次からは怪我をしないように注意するんだ。	7	1
D 君にはまだ未来がある。ここで無理する必要はないよ。	4	2
E 練習してきたことは無駄にはならない。まだ次がある。	3	1
F くやしいか?そらくやしいやろな。俺も学生の時におまえと同じにけがしてしもうてな。あん時はほんまにくやしかった。でもな、そのくやしさをバネにして練習したから、今の俺があるんや。おまえも次にむけて頭をきりかえろ。	6	2
G 人生そんな時もあるさ。努力がむくわれない時が。でもな、ここでやめたらあかん。まだ先が長いからな。	4	2
H アホ。早く直せ。	1	19
I 「自分のせいだ!」と言っておきながら、試合が終わった後に「これも経験!」と言ってあげる。	2	1
J その試合が君の競技人生で一番大切じゃないよ。	3	7

- 3 マラソン大会で、制限時間をオーバーしたためにバスに収容しなくてはならなくなったので、どうしても走ると言っけかかない中年のランナーに対して

回 答 例	賛成	反対
A 同じ陸上競技をしている者として、気持ちは良くわかりますが、あなたが、我々の立場に立ったとき、どうしますか。	10	4
B 走り切りたい気持ちもわかりますが、次回走り切れるよう体力をつけてそれを目標にして次回チャレンジしてください。	9	0
C もう制限時間を過ぎていてバスに乗ってくれなければ周りに迷惑がかかるんですけど。今回はここまでで次の大会で完走してください。	2	2
D 自分の気のすむままにやってください。	4	2
E 歩道を走ってください。	2	7
F あわてなくてもいいから、休んでもいいから、絶対にゴールしてください。	4	4
G どうしても走りたいなら走ってもいいが、あなたも大人なのだから他人のことを考えて行動してください。	0	2
H ずっと見てますよ。	2	2
I 最後まではしりぬこうとする精神はすごいですね。	1	0
J あなたはルールのあるスポーツの大会に選手として参加しています。そのルールの一つの時間をオーバーしてでもまだ走りたいのなら、その時からあなたは選手でなくなりますよ。それでもよいのなら走りなさい。	6	5
K バスが発車しますよ、いかがですか。	1	6
L 私も一緒に走ります。	0	6

結果・分析

(表1-1)の結果はスポーツにとっての言葉の重要性をあらためて感じさせる。

支持者の多かったものを上からみると、

- F お前が居てくれてよかった。
- H お前の力は信じている、思い切って戦ってこい。
- D やればできるじゃないか。
- A 1年前よりずっとうまくなったね。

といった例に支持が多い。これは武田健の指摘する「何かの方法で『よくやった』というコーチの気持ちを伝えることを総称して『誉める』という言葉で表現していると理解していただきたい。」⁽⁴¹⁾に適合する例といえる。日本社会では、「あまり誉めるとクセになる、誉めないと選手が一生懸命やらなくなる、誉めると弱い人間ができてしまうといった迷信が私たちの社会には横行している。だがはたしてそれは本当なのだろうか。小学生や中学生の両親と話していると、子どもたちにとってコーチが誉めてくれる一言が実に大きな意味を持っていることがよくわかる。」⁽⁴²⁾と武田健が指摘するように、特にスポーツの場において誉めることはあまり積極的ではなかった。この傾向は現在もあるといえよう。そんななかで、やはり指導を受ける側は、コーチから、言葉によって信頼され誉められることを表現されることで、自己の競技能力にたいする強化子として取り入れられていることがうかがえるのである。

(表1-2)についても見てみると、

- D もう、しらん。お前はもう強くない。もう面倒は見ない。
- E 違うって。もういいよ。
- F お前にできないプレーなんか求めている。お前は自分ができるプレーをしろ。
- H 今のお前じゃそんなもんだ。
- K どうしてこんなことができないんだよ。

といった例にたいして、学生の反発が多い。これらも武田健が指摘する、

選手に自分の怒りや不満を八ツ当たりにぶつけてしまうようなことがあっては大変である。コーチは選手を自分の個人的な満足のために利用していないか、反省してみる必要がある。自分の寂しさをまぎらわすために選手をかわいがり、自分の自信のなさを忘れようとするかのように選手をおさえつけ、自分の不安を振り払うために怒鳴り散らしている可能性があることに注意しなくてはならない⁽⁴³⁾。といったコーチ像に結びつく発言といえる。(表1-1)と比較してまさしく選手とコーチの「信頼関係」の裏面をなすものと考えられる。将来体育のコーチをめざす学生に、こうしたコーチングの際の思いやりのない言葉がいかに関心の心を傷つけ、お互いの信頼を害うのかを理解させておくことは重要であると考えられる。

(表2)

いままでの自分の競技歴のなかで、言われて嬉しかったはげましの言葉

励ましの言葉		同感	違和感
A	1年前よりずっとうまくなったね。	5	1
B	(試合に負けたとき)もっともっと強くなれる。これを通過点にして一歩ずつあがっていけばいい。	2	0
C	お前みたいに一生懸命やっていると、やはり報われるものだな。	2	0
D	やればできるじゃないか。	6	0
E	ここまでこれたことに自信を持って気持ち良く走れ。	2	0
F	お前が居てくれてよかった。	10	0
G	ファイト	4	2
H	お前の力は信じている、思い切って戦ってこい。	7	1
I	根本とは何か。	0	0
J	You can do it!	0	0

いままでの自分の競技歴のなかで、言われて嫌だった叱りの言葉

叱られた言葉		同感	違和感
A	下手くそやなー。	2	0
B	帰れ!!	3	0
C	やる気がないならやめろ。	4	0
D	もう、しらん。お前はもう強くならない。もう面倒は見ない。	9	0
E	違うって。もういいよ。	7	0
F	お前にできないプレーなんか求めている。お前は自分ができるプレーをしろ。	5	0
G	なんであんな走りしかできんのや。	0	0
H	今のお前じゃそんなもんだ。	5	1
I	バカ、やめちまえ。	2	1
J	お前の顔は天狗になっている。いつか何かやらかすぞ。	2	2
K	どうしてこんなことができないんだよ。	5	0

(表2)は(表1-1)・(表1-2)の分析をふまえて、学生自身がコーチの立場となった場合を想定して回答させたものである。

Iでは幼い子供にたいしての言い方を考えさせた。

C あとほんとにもうすこしでできそうだったよ。もう一回やってみようよ。

G どうした!○○ちゃん。よーし、すこし休もうか。

H 少し休憩にしよう。鉄棒は逃げていかないから。

の3例には支持が多かった。やはり、子供を追いつめるような言い方がコーチとしてはふさわしくないことは、先の(表1-1)・(表1-2)での自己の経験をもふまえて学生に自覚されていることがうかがえる。このことは同時に、

F ここでやめたら一生できなくなってしまうよ。それでもいいの。

にたいしての反発の多さにも通じていると考えられる。

また、

D どうせ泣くならうれし涙を流せ。

について、支持と反発とが両立しているのは、おそらく子供にたいしての指示としては不適切という判断が働いたものと考えられる。この例からは、武田健も指摘する「いらいらして、ただ『頑張れ、頑張れ』と怒鳴っても大して役には立たないだろう。それよりも、どうやるかということとを具体的に示してやることの方がはるかに効果的である。そして、もっと大切なことは、選手に対する愛情である。コーチが選手のことを思い、何をしてほしいか、何をすればいいかということに心をくばることが、コーチングの中心になくてはならない。コーチはただ単に技術の伝達者ではなく、心と心の触れ合いができる人間でなくてはならない。』⁴⁰という理想的コーチ像を学生たちも志向しているように考えられる。

2では、先の子供から青年期の生徒へと対象を変えて考えさせた。

A 今無理をして試合に出て、けがを悪化させて、この後プレーできなくなるより、今は我慢して今回はみんな見て、学ぶのがいいよ。みんなをサポートするのも勉強だからね。

やCに支持が多かったのは、先の例と同様にコーチとして感情に左右されず、冷静に生徒を見て、思いやりのある言葉をかけていることへの共感ととらえられる。

H アホ。早く直せ。

の言葉に反発が多かったのは、その裏返しといえよう。

J その試合が君の競技人生で一番大切じゃないよ。

への反発は競技者にたいして一見思いやりがあるかにみえる言葉であるが、試合に賭けて練習してきた経験者としては、やはり冷静すぎる言葉と感じたからであろう。こうした反応は、コーチには競技経験者としての経験が必要な資質のひとつとしてあげられることの裏付けともなるであろう。

3は、自分たちより社会経験も豊富な成人にたいするシミュレーションである。全体的にみて、

A 同じ陸上競技をしている者として、気持ちは良くわかりますが、あなたが、我々の立場に立ったとき、どうしますか。

B 走り切りたい気持ちもわかりますが、次回走り切れるよう体力をつけてそれを目標にして次回チャレンジしてください。

J あなたはルールのあるスポーツの大会に選手として参加しています。そのルールの一つの時間をオーバーしてでもまだ走りたいのなら、その時からあなたは選手でなくなりますよ。それでもよいのなら走りなさい。

など、指示が相手を追いつめていくような厳しい言い方になっている。それは、設問が「走ると言ってきかない」と誘導したための結果といえるかもしれない。しかし、学生に「コーチングは年少者にたいしてなされるもの」という先入観が潜んでいる可能性も、先の1・2の例と比較して指摘できるのではなからうか。こうした状況もコーチとして活動していく場合ありえるということを理解させ、先の子供や生徒の例と同様、年齢にかかわらずコーチングしていける能力も

期待されることを考えさせる良い例となったともいえよう。

E 歩道を走ってください。

K バスは発車しますよ、いかがですか。

についての反発は、コーチとしてと言うよりも、社会人として、こうした言い方は年長者にたいして失礼であるという社会的規範による判断がはたらいっているといえる。

L 私も一緒に走ります。

について反発が多かったが、これはおそらく先に指摘したように、学生のコーチングへの先入観によるものといえる。ここでは、もしも相手が子供や生徒でも、このように言うことは不適切と感じるかと学生に問いかけることによって、コーチは相手が誰であろうと、常に相手を思いやり、選手とともに何ができるかを考える姿勢を持つべきであることを考えさせた。

(表3)は(表1)・(表2)におけるコーチの対応とは矛盾する言語活動を意図していると思われるかもしれない。よいコーチは何をなすべきかを具体的に指示してくれるコーチであるという立場からすると、(表3)で与えられる言葉は、きわめてメタファーの要素が強くなっているからである。しかし、これはコーチングというより、むしろ、選手自身が「言葉」を自己のなかに取りこむことによって効果的になるリラクゼーションへの応用を意図したものである。R・Nシンガーによれば、リラクゼーションのプログラムには、「瞑想法」として、

瞑想法では1つの考えに集中し内観することによって、精神の緊張がときほぐされると考えられている。精神集中の対象は特定のことばやイメージである。完全に弛緩した状態は、瞑想する能力を得た人々によって、差し迫った課題にとりかかるエネルギーを増加させるものとして報告されている⁽⁴⁹⁾。

が挙げられている。この際「ことば」が「精神集中」に利用されるには、ある「理解」が前提となってくる。そして、その「理解」は、おそらく「経験」を共有してはじめてなされるものともいえる。ここでの「ことば」が、(表3)で学生たちが選択した言葉の例とは必ずしも一致しているとは断定するのは早計である。だが、逆にいえば実際の「ことば」の例を具体的に調査された研究もないようである。とするならば、(表3)の「ことば」の例は、I「はじめに」で述べた「言葉」の「理解」には「経験」が関わっているという説とも深い関連が出てくるといえよう。一つの「言葉」がそれを選んだ学生自身も含め、誰かを精神的に支えていく要因になることを理解させ、コーチとして選手たちに与えるにふさわしい言葉を見つけさせることで、競技の場面だけでなく、選手の人間性を支える場面での応用の可能になると考えたのである。

(表3)には、全部で41例が示されたわけであるが、その特徴を指摘してみよう。

(表3)

この言葉を	出典	こんな人に
万里一空の如し	『五輪書』	理屈だけでものを言う人に
強敵は自分自身だ	アベベ・ビオフ	陸上のコーチとして生徒たちに
臨機応変	『南史』	人生を楽しく生きること共感する人に
腕一本の野球選手の場合、その選手生命は残念ながら年数が限られている。まして、そのプライドが高くなければ厳しいスポーツの世界を生きぬくことはできないであろう。その源泉であるプライドを失ったら辞めざるをえない。	野茂英雄	バレーボールをやっていて、高校時代のプライドや自信が失われつつある自分に
身は限りあり恋は尽きせず	『好色五人女』	恋愛で苦しむ人に
人に勝たんと欲する者は必ず先づ自ら勝つ	『呂覽』	大会を控えた後輩・自分も含めて
苦しいときは自分が試されていると思え	藤間林利男	生徒が苦しく挫折しそうな時・自分に甘えている時
人間は努力をする限り迷うものだ	ゲーテ	大学を休学してやり直そうとしている友に
一生懸命やれば、結果はどうあれ涙が出てくるものだ。だから、私は終わってから涙の流せるような試合がしたい。	千代の富士	スポーツをやる人全員に
阿呆はいつも彼以外の人をことごとく阿呆と考えている	芥川龍之介 『侏儒の言葉』	自分に対するの自戒
友達こそ本当の財産だな	本田宗一郎	友達を作らない生徒に
稽古にはよく覚え初日にはこれを忘れて出る	市川團十郎 (九代目)	試合に出る生徒たちに
だれでもいつかは負ける	白井義男	定年を控えた体育教師であった父に
失敗は成功よりも美しく又更に成功よりも教訓と力に富めり	石川啄木 『古酒新酒』	失敗をしてしまった人に
水清ければ魚棲まず	『孔子家語』	何事にも真面目すぎる友人に
急ぐべからず	徳川家康	時間に追われたりして焦っている人に
狡兎死して走狗烹られ、飛鳥尽きて良弓蔵められ、敵国破れて謀臣滅ぶ	韓信	自分の弟に
良薬は口に苦し	『孔子家語』	就職して上司に反発する友人に
実る程頭を垂れる稲穂かな	△稻生和人	自分の力を過信する生徒に
遇ちてはすなはち改むるに憚ることなかれ	『論語』	自分を無理に通そうとする生徒に
ゴルフに年齢はない。これを行なう強い意志さえあれば、何歳からでも上達する。	ベン・ホーガン 『勝つためのゴルフ』	ゴルフで負けて弱音を吐く父に
夢なき者理想なし 理想なき者目標なし 目標なき者実行なし 実行なき者成果なし 成果なき者喜びなし	谷口浩美 『雑草のごとく』	部活動を辞めようとしている後輩に
人知らずして温らず、亦君子ならずや	孔子 『論語』	レギュラーから外され納得がゆかない時、先輩から言われた
恋愛は人生の秘鑰なり	北村透谷 『厭世詩家と女性』	恋愛を悩む生徒に
豚的幸福	夏目漱石 『我輩は猫である』	自己中心的な生徒に
とかく女は化物	『好色五人女』	結婚をする人に
希望していたものを手に入れたと思ひ込んでいるときほど、われわれが願望から遠く離れていることはない。	ゲーテ 『ファウスト』	来年度の新入生に
天に星が輝いていても、あなたが見上げなければなれないに等しい。あなたがあなた自身に目を向けなければ、あなたの価値もないに等しい。	伊藤 寿 iBD セミナー 主宰	自分が世の中で価値がないと思ひ込んでいる人に
男は不器用でいいじゃないか。	森祇晶	生徒たちに
己れの欲せざる所、人の施すこと勿れ	『論語』	中学時代いじめっ子だった友人に(その時実際にそう思った。)
斯機の戒め	『列女伝』	大学に入学して中だるみの自分に

嫁して人の妻となるは難し、然れども嫁の母たるは更に難し	東郷益子 『聖将東郷全伝』	結婚していだろう自分に
あやまちは、やすき所に成りて、必ず仕る事にて候。	吉田兼好 『徒然草』	柔道で自分より弱い相手を甘く見ている生徒に
スポーツ選手を目指す若者にとって大切なのは正しい種目を選ぶことだ。ほかと比べてどれが一番マシかではなく、どれをもっとも愛するかだ。心底その種目に惚れ込むことがなければ、必要なだけの頑張りが出てこない。オレか。オレは打つのが大好きさ。	ベープ・ルース 『勝利の秘訣』	バレーボールを小四からやっている自分に
学校ってものは、からだとからだのおっつき合うところだ。先生の魂と生徒の魂の触れ合う道場だ。それで初めて、生徒は何ものかを体得するのだ。一生忘れないものを身に付けるのだ。	山本有三 『路傍の石』	不良生徒に悩む教師たちへ
私は本当に幸せ者だ	カール・ルイス	自分を支えてくれる人々に
キ歩を積まざれば、以て千里に至るなし	荀子	生徒たちに
成せば成る成さねば成らぬ何事も成さぬは人の成さぬなりけり	上杉鷹山	陸上で挫けそうになった人に・自分も含めて
海が恋しい—これは予の浪漫的（ロマンティック）である。	石川啄木 『汗に濡れつつ』	素直でなくなり自信も失って友人から離れられそうな自分に
同じ雰囲気を出せるまで十年間かかった	山下泰裕	大学に入ってから半年間スランプの自分に
好機に会わない人間なんぞ一人もいない。それを捕らえ得なかったというまです。	カーネギー	悩んでいる人に（自分が優柔不断だから）
知る人は言わず、言う者は知らず	老子	テレビなどのニュースキャスターたちに
怒りは敵と思え。	徳川家康	短気でよく失敗する自分に
人生は何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短い	中島敦 『山月記』	友人に
どれほど深く悩み得るかということがほとんどの人間の階級を決定する	ニーチェ	自分の教え子たちに
負けて勝つ	辻野朝晟 洛南高校体操部監督	スランプにいる妹に
少年老いや早く学成りがたし	朱熹	部活動ばかり気にしている自分に
衆人がみなと善をするのなら己れひとりだけは悪をしる。逆もまたしかり。英雄とは自分だけの道を歩く奴のことだ。	司馬遼太郎 『竜馬がゆく』	自分に
何よりもまず汝自身を尊敬せよ。	ピタゴラス	自分を見失い落ち込んでいる人たちに
初心忘るべからず。	世阿弥	入学して半年たって甘えている自分に

まず、文語的表現が21例を占めている。このことは、文語が日常的な言葉ではないため、そこに権威を感じるという現代人の言語感覚が影響しているといえる。また、「AはBだ」という表現が多い。これは、先のG・レイコフ・M・ジョンソンの指摘にもあるように「時は金なり」「人生は旅だ」というようなメタファーを志向する人間の言語活動によるものであるといえる。さらに、驚くべきことには、学生たちの「言葉」を探している範囲の広さである。スポーツ選手の例は9例にとどまり、古今東西の「古典」といわれるものの中から「言葉」を探しだしていることには、注目すべきであろう。国語教育の上からも、教訓的教条的として除外されがちであった「ことわざ」「格言」などの見直しや、漢文での「故事成語」の授業の有意義性を模索するための一つの材料となるかとも思う。

次に、まとめとして、学生が実際に書いたレポートを参考までに示しておく。

「この言葉をこんな時に」 体育専門学群 1 年次 M. Y

「断機の戒め」。この言葉は、中国の孟子が残したものである。孟子は、周の時代の指導者で、孔子の跡を継いで、仁を根本とする政治・道徳のおしえ、儒教を発展させた人物である。この言葉の出典は、前漢の儒学者、劉向が著した列女伝母儀篇である。

そして、この故事成語の意味は孟子が幼いころ故郷の母を慕って帰ったところ、母が織りかけの布の糸を断ち切って学問の中断することを戒めた故事。学問を途中でやめてはならないという教訓である。

私は筑波大学体育専門学群に入学してから、7か月もたち、大学のしくみを知り、だんだんと慣れてきたところである。今は一学期も終わり、二学期も期末試験に近づいてきている。

入学したての頃は、高校の体育教師を目指し、勉学に励もうと意気込んできたが、今となっては、毎日部活動にあけくれ、一生懸命やって疲れてしまい、宿舎に帰って寝るだけの生活が続いているのである。そんな時に国語 I の講義で、このレポートが課題になったのである。レポートというのは、色々とわずらわしいものなので、最初はめんどくさがるのが普通だが、調べていて、「断機の戒め」という故事成語に出会い、私は今までにない感じを受けた。そこで、この故事成語をレポートに使うことにしたのである。

私はこの「断機の戒め」という故事成語を、今までのこのような生活を変えて、今から大学生活を充実したものにするため、自分自身に贈りたい。いや、忠告したいというほうが適当であろう。

参考文献は雄山閣「故事成語・ことわざ事典」

このレポートからも、学生が「言葉」を「経験」とともに内面に取りこむことで「生きる力」としている実態がうかがえる。おそらく、今後もこの学生にとって「断機の戒め」という「言葉」はある「メタファー」となって記憶のなかに生き続けることであろう。そして、同様な「経験」をする他の学生にとってもこの「言葉」は強く印象を与えることになったはずである。また、この学生が、将来コーチを職業とした場合にも、おそらく選手たちにも自己の経験から敷衍して与えられる言葉となるであろう。そうした一言を数多く身につけていることは、コーチの大切な資質の一つであると考えられる。

Ⅲ まとめ

「人間」と「言葉」の関わりを「経験」から見るという視点に立っての「国語」の実践的研究を実施した。まだまだ十分に先行研究を消化しきれていない部分もある。たとえば「仲間ことば」の問題や「命名」の問題などにも目を向けさせて、より広い視野からの「言葉」への関心を育ててから、学生に学習活動をさせた方が良かったかもしれない。また、今回は体育専攻の学生のみ対象を絞って実践したが、他の学生との比較・対照も必要であったかとも思う。

しかし、ここに提示できた調査の結果は、「体育」や「国語」という教科の枠を超えて「言葉」の問題として興味深いものがあるといえよう。そして、それは学生にとっても、これまであまり深く考えてこなかった部分であったといえよう。

大学での「国語」の存在を考えると、多くは大学生としての「教養」の育成のためにあるとするのが、当然の考えであろう。では、その「教養」とはいかにあるべきかを問うとき、その答えは難しい。しかし、少なくともどのような専攻であれ、相手や場に応じた言語活動が円滑になされる資質があるということは、「教養」の大きな要素であることは確かである。今回の試行的実践はその一端を目指したものとして理解していただきたい。

引用文献

- (1)(2) E・サピアほか著 池上嘉彦訳『文化人類学と言語学』弘文堂 1995.3 p.324
- (3) 大平浩哉・鳴島甫『高等学校国語教育情報事典』戸田功「言語と認識」大修館書店 1992.11 pp22-24にもはやその解説がなされている。
- (4) 田中孝一「生涯学習の基礎を培う国語教育」『月刊国語教育研究』299 日本国語教育学会 1996.3 pp29-30
- (5) レオ・バイスゲルバー「母国語の世界像」E・サピアほか著 池上嘉彦訳『文化人類学と言語学』弘文堂 1995.3所収 p.196
- (6) 志賀直哉『志賀直哉全集』第2巻 岩波書店 昭和47.7 p.176
- (7) 国木田独歩『定本国木田独歩全集』第3巻 学習研究社 1978.3 p.97
- (8) S・スマイルズ 中村正直訳『西国立志編』講談社学術文庫 1981.1
- (9)(10) G・レイコフ・M・ジョンソン『レトリックと人生』渡部昇一ほか訳 大修館書店 1986.3 訳者あとがき p.257
- (11)(12)(13)(14) 武田健『コーチング—人を育てる心理学—』誠信書房 1985.9 p.60,p.61,pp.10-11,p.184
- (15) R・Nシンガー 松田岩男監訳『スポーツトレーニングの心理学』大修館書店 1986.7 p.260

参考文献

- a 土田友則ほか『現代文学理論』新曜社 1996.11
- b 港 千尋『記憶「創造」と「想起」の力』講談社メチエ 1996.12
- c ポール・リクール『生きた隠喩』久米博訳 岩波現代選書 1984.8